

OCUAC

大阪市立大学山岳会会報

NO.39

2004.12

- 平成16年度夏山合宿を終えて（佐々木惣四郎、現役）
- ヒマラヤ二人旅 . . . 佐々木惣四郎
- 紅葉を訪ねて
—黒部源流の山を歩く— . . . 鷺田英毅
- ヒュッテ雪線のリフォーム . . . 久保田淳三
- 桜蘭古城を訪ねて . . . 中嶋信正

平成16年度
夏山合宿を終えて
(8/8-15)

S40年卒 佐々木 惣四郎

40年前大日尾根を経由して剣の二股にベースキャンプを張ってひと夏を過ごしたのであるが、今回は3人の現役と3人のOBの合計6名で真砂沢にベースを張る事になった。真砂沢のテント場は、ほぼ学生山岳部の約20のテントであり、OBも多く参加していたようだ。どこの学校も厳しい部員状態のようだ。

今夏の目的は雪渓登行と岩尾根登りと決めていたが、雪渓は7月の豪雨の為か細り9月の様相を呈していた。つまり、平蔵雪渓上部は雪渓がなくガラ場と化し、長次郎雪渓はズタズタに切れ高巻きをしないと上部に行けない有様である。三の窓にいたっては渡渉しないと行けない状況で接近は諦めた。40年前の二股は荒れ果てて昔の面影はなく啞然とさせられた。特に、剣沢の雪渓の真中に土砂が盛り上がっておりビックリ。

最大のイベントは、チンネの岩登りであったが、雪渓の状況から取り付くまでに約5時間かかる事がわかり八つ峰Cフェース 剣綾会ルートへ2パーティで取り付いた。TOPはOB 山田と佐々木で、現役の塩見、小椋がセカンドとなった。わづか合宿前 3回の岩登りトレーニングであったが塩見はクライミングシューズで意欲満々で、小椋は慎重を期した登りであったがルートが明確で、快適な登りを楽しめた。

剣の大きさを実感されたのは源次郎尾根で1峰への登りが長く本峰へ辿り着いた時は正直ホットした。1700Mのベースから3000Mまでの旅であったがテントまで9時間半もかかった。ルートは尾根ルートで平蔵雪渓を取り付いてからすぐに草付きにはいるのがただしかったが、ルートに入るまで時間を食った。

雪渓の登行では塩見君が断然強くて早くたえず先頭にたった。朝早いアイゼンなしの登りは気も体力も使い、やはりアイゼンはあつ

た方が良かったと思った。新しい発見は長次郎のクマノ岩上部の平地にテントが張られており、八つ峰の岩場が正面に望まれた。水も流れており素晴らしいテントサイトであるが次回はいつ来るチャンスがあるだろうか？長次郎雪渓の右股奥の池の谷乗越までの雪渓はズタズタでチンネからの帰るクライマーが苦勞して下山してきたがそれ程多いようには思えなかった。池ノ谷から北方稜線経由で本峰—剣沢のパーティがいたが12時間半かかったとの事であった。



源次郎尾根1峰より八峰

真砂沢のテントサイトは水道もあり午後2時頃に毎日帰りダベッタ。現役のテントとは5月と同様、OBと全く分け食事も別としたが会話まで不足したと反省している。それにしても8—13日迄の天気は最高で14日から途中から入山した上田 OBと現役和田、佐々木の3人で阿曾原に下ったが雪渓の悪さと雨で阿曾原に8時間かかり、さらに樺平まで5時間の歩行を強いられ、7泊8日の合宿を温泉湯に浸って振り返る事ができた。来年から現役は単独で合宿に入る事ができるだろうか？と自分にといかけながら！！今回は山田 OBの参加により、始めてできた合宿だったのである！

剣合宿を終えての胸の想い
現役 小椋 剛

剣岳は山そのものが素晴らしく、行ってよかったと確かに思いました。内容的にも中々充実していて、長い夏の雪渓歩き(急斜面の下

りはちっとも上手く歩けませんでしたか・源次郎と八峰の岩稜登攀・池の平（雨のため北方稜線には行けませんでしたか）と真砂沢でのキャンプ生活、と、どれをとってもいい経験になりました。ただ、1つだけ、六峰Cフェースの岩登りだけはやっぱりだめでした。



今年の平蔵谷の雪渓

どうも岩はスポーツ的要素が強すぎて、スポーツが嫌いで、スポーツに意義を見出せない僕は岩を好きになれる気がしません。でも、まあ内容的には満足でした。ですが・・・

真砂沢には、大学山岳部がいっぱい来ていましたので、その様子を横目で見てみると山に対する意識の違いが見えるように感じました。根本的に彼らは山に、岩に、登る事を考えてここにやってきて取り付いているのだから、トレーニングもして、計画もしっかり立て、メンバーも自覚的で、共通の思いがあり、気の入りようが違う。山を、自然に楽しんでいる気がする。所がこちらは、メンバーの時間が合わない・岩トレも参加していない人がいるからその人は本番の岩登りには当然来れない。で、結局、来れる来れないの問題の後、合宿は参加者少数で終わってしまう。僕が思うに、本来なら、山への計画の段階からわくわくし、登っている間はきつい事もあるが、要所要所では忘れられないような体験をし、帰ってきてからは又新たな計画を立て、そのための用意をし、早くその日が来るように待ち望むような状態であるはずなのに、今回は・・・それがあったとは言いがたい。山は、行けばきっと楽しいはずなのに、せっかく山岳部に入って、しかも高い道具まで買って、それなのに、みんなばらばらの状態で、

こんな思いで行かなくてはならないと思うと、何か悲しくなってきました。

もちろんOBさんの思いは伝わってきますし、僕たちにわざわざ付き合ってくれていることには、大変ありがたく思っています。しかし・・・こんな事ゆうのも何なんですが、少し物足りないのです。せっかく集まった部なのに、メンバーがほとんど参加しずに終わってしまう僕の山岳部の生活は、一体なんだったのだろうかと思うのです。

今回の合宿は歩いてるときに、部の今後のことを考えることがあって、少々息苦しかったです。

2004 年夏山記録」 塩見の日誌より

2004 年 8 月 8 日（日）

大阪―室堂―雷鳥沢

場所	到着時刻
千里中央ライフサイエンスビル	12:10 通過
立山I. C.	
立山駅パーキング	
レストラン	12:40
立山駅	13:10
美女平	
室堂	13:50
雷鳥沢	14:42
	15:45

8時15分に千里中央ライフサイエンスビル集合のはずであったが、なかなかリーダー小原が現れない。和田君や僕は時間通り着いて、上堂さん（OB）も迎えにきているのにどういことだろうか、まさか寝坊かと思ったが、そうではなかった。出発時刻の8時30分になって、ようやく現れる。理由が、その風貌を見てなんとなく分かった。すさまじい荷物だ。いつもなら10分のところが、30分もかかったということだった。それも分かる。みんなそろって、出発する。

上堂さんはすごい運転だ。名神高速は、比較的混雑していたためスピードはあまりでていなかったが、北陸道では150キロはコン

スタントに出ていたと思う。だからといって、怖い運転ではなく、なんかバンバン追い越してるな—と思うと、そんな速度だったという感じた。途中一回の休憩し、立山駅の駐車場に約4時間で到着。上堂さんの運転では、大阪と富山は近いと錯覚してしまいそうだ。

上堂さんのおごりで、から揚げ、フライドポテト、リンゴジュースを駅に隣接しているレストランでいただく。量もあり、おいしかったのだが、ケーブルの時間が迫っていてゆっくりはできなかった。しかし、山の上での生活を想像し、当然きれいにたいらげた。

観光客のうじゃうじゃいる室堂をぬけ、雷鳥沢へ。立山は、ガスっていて全貌は見えない。雷鳥沢で、電車で先に到着していたOBの佐々木さんと山田さんと合流する。初日ということもあり、和田君を含めみんな30キロを超えていたが、コースタイムが45分で、また、下りだけということもあり、そんなに辛いものではなかった。しかし、明日登ることになる霧にかすむ別山乗越を見上げると、やや気分はブルーだ。

夕飯の前に、野草の会を一時間実施する。僕が持ってきた文庫サイズの事典が役に立ち、9種同定できた。夕飯のすき焼きうどんは、量的にも質的にも成功。

今日の天気は、快晴になったり雨がぱらついたり、変わりやすい天気だった。小椋君は、星を見るために星座版を持ってきたようだ。しかし、今夜は曇りで使えない。

8月9日(月)

雷鳥沢テンバー別山乗越—真砂沢テンバ

場所	到着時刻
雷鳥沢テンバ	
休憩	7:10
休憩	8:00
剣御前小屋前	8:40
剣沢小屋前	9:30
雪渓に入って	10:35
真砂沢小屋	11:57

4時45分起床。朝食の雑炊は、そこそこ

うまかった。しかし、朝の貴重な時間を米炊きに使うのはもったいないと思う。別山乗越へ行く道を間違え、立山のほうへ行きそうになった。10分ほど時間をロスしてしまう。別山乗越は、想像通りしんどいものであった。ただ、小椋君のベストなペースのために、3本で乗越せた。重かった。岩崎元朗さんに乗越の直下ですれ違う。そこから真砂沢までは、単調な下りであったが、パッキングが最悪な上に雪渓を下るのが苦手な小椋君は、苦勞していたようだ。雪渓は、この梅雨の時期の豪雨のためか、土砂が堆積していた。また、後で聞いた話だが、例年の9月なみの雪渓だということだった。

テントサイトは結構混雑していたが、どういわけか水場が一番近い快適な場所に張ることができた。野草の会を再び実施した。夕方に、土砂降りの雨が降ったが、その夜は、小椋君は、満点の星を満喫できたようだ。夕飯は、ハンバーグとレトルトカレーで、たいへんうまかったが、やや足らない。

8月10日(火)

真砂沢—平蔵谷—剣岳—長次郎谷—真砂沢
雨のち晴れ

場所	到着時刻
真砂沢	
長次郎谷出会い	5:50 通過
平蔵谷出会い	6:13
休憩	7:31
休憩	8:15
一般登山道に出て	9:00
山頂	9:50
長次郎谷のコル	10:42
熊の岩で六峰を見ながら	12:25
剣沢との出会い	14:00
真砂沢	14:27

雪渓歩行訓練のため、平蔵谷を登って長次郎谷を下る。平蔵の登りでばらばらと雨が降り出す。ところどころに、クレバスがあったが避けながら登る。平蔵谷の最後は、雪渓は

なく、ガレ場歩きになった。雨はすでにやんでいたが、先ほどの雨のため滑りやすくなっている「かにのタテバイ」を通過し、人の多い山頂に着く。山頂の眼下は曇っており、景色は良くないが、日が差し気持ちがいい。頂上から長次郎谷の科尔までは、ところどころ怖いところがあった。長次郎谷の上部は、急斜面である上に、クレバスが大きかったため2ピッチ、ザイルを出す。それ以降は、軽快な雪渓くだりだった。途中、六峰フェースが良く見える熊の岩のあたりで、長い休憩をしてテントへ帰る。空身だったせいかな昨日と比べると、体力の消耗は少なく、久しぶりの山らしい山で、気分も乗ってきた。

8月11日(水)

六峰Cフェース カンカン照り

場所	到着時刻
真砂沢	
長次郎谷出会い	5:55 通
休憩	過
休憩	6:20
Cフェース取り付け点	7:26
	8:00
Cフェースの頭	10:10
科尔を通過し、雪渓に入る前の休憩	12:30
剣沢出会い	13:20
真砂沢	14:45

クライミングの道具を分担した後、テントを出発する。今日は、Cフェース剣稜会ルートを上り八峰の頭へと向かう予定である。昨日は下った長次郎谷を登る。今朝は、本当に良く晴れている。そのためか、放射冷却で、やや肌寒い。雪渓もキックステップが効かないくらいに硬い。途中危うい雪渓のトラバースがあった。九大の人たちは、ザイルを出していたが、我々は大丈夫だろうということで、慎重にブレードでカッティングし対岸へ渡る。そのあとは、踏み跡をたどり、Cフェースの取り付け点につく。なんかすごい緊張する。山田さんと僕が先に行き、佐々木さんと小椋

君が次に続く。上堂さんと和田君は、5.6の科尔から稜線歩きをして、Cフェースの頭で落ち合うことにする。

山田組はザイルが40メートルだったために、やや変な場所でピレーをしなくてはいけなかったが、信頼できる残置ハーケンやボルトが多かったので、特に問題はなかった。佐々木組も問題なかったようである。結果として、2組とも無事登れたが、今回は最初の本チャンで、しかも初めての人とザイルを結ぶということは、大変不安だった。山田さんはコールの返事をしない主義の人らしく、何度も叫ばなくてはならない場面があった。やはり、ザイルを結べるのは、いくら一方がベテランであったとしても、お互いよく分かったもの同士である必要性を感じた。初めての岩は、期待していた通りの充実したものであったが、逆に、驚沢な話だけが予想を超えるようなものでもなかった。



八峰六峰フェース (右からA,B,C,D)

Cフェースの頭にたどり着いたものの、上堂組がこない。行き過ぎたのかと思い、Dフェースの頭へ行く。先にDフェースをやっていた杉山さんと白方さんに出会い、写真を撮ってもらう。上堂組が、Cフェースより先に行った形跡はないので、予定をかえて、5.6の科尔へとくだることにする。下ると和田君と上堂さんがいた。5.6の科尔から現れる岩壁がザイルなしでは登れなかったからさうで

ある。われわれは、懸垂下降しなかったが、ほかのパーティーは懸垂下降で降りていた。そのようなところを登るのはザイルなしでは確かに難しい。和田君は、残念だろうと思う。

そこからは、ひたすらテンバへと下った。テントでうだっていると、上田さんが現れてせんべいを差し入れてくれた。うれしい。夕飯の Pasta は、量、味ともに最高であった。

8月12日（木）

源次郎尾根 カンカン照り

場所	到着時刻
真砂沢	
長次郎谷出合い	5:45 通過
取り付き点	6:00 通過
1 峰手前の尾根上にて	7:15
山田さん落石に会う	9:00
1 峰	9:25
2 峰懸垂ポイント	10:10
休憩	12:00
剣岳山頂	12:12
平蔵谷のコル	13:02
真砂沢	14:50

いつもどおりの出発だが、上堂さんは大阪に帰り、今日からは上田さんが新たに参加することになった。源次郎尾根に取り付くが、尾根を歩くつもりでルンゼ側から、尾根に取り付いたが、尾根側のルートを見失う。しかし、小椋君が平蔵谷から続く尾根ルートを見つけ、やや時間をロスしたが、うまくいった。一峰までは、非常に急で岩登りと木登りの連続であった。こういった登山は、緊張しすぎず、飽きさせず、わくわくして好きだ。一峰あたりから、岩稜歩きが始まる。一峰手前の浮石の多いところで、落石が山田さんのひざにあたった。歩ける程度だったので、不幸中の幸いだった。改めて、危険なところにいることを感じさせられた。

一峰から二峰は意外と近かった。二峰からの懸垂下降は、初めての本チャンということもあって、現役は手間取った。しかし、初め

てにしては、よくできたほうだと思う。そこからは、特に難しい場所もなく、頂上直下で、一回無駄に休憩し、5 分後頂上に立った。

下りは長次郎谷が、グサグサだったので、平蔵谷を下る。1 リットル持ってテントを出たが、カンカンに晴れてしかも全身をフルに使わなくては行けないルートだったせいもあり、のどが非常にかわいた。最後はちょっと我慢しなくてはならないはめになったので、やはり 2 リットルは必要だろう。

8月13日（金）

ハッ峰下半 カンカン照り

場所	到着時刻
真砂沢	
長次郎谷出合い	5:45 通過
岩小屋の前で休憩	6:30
藪の合間で休憩	7:20
休憩	8:10
3,4 のコル	8:35 通過
4 峰懸垂ポイント	8:45
5,6 のコル	11:25 通
佐々木さんと出会う	過
剣沢との出合い	11:55
真砂沢	12:35 通
	過
	12:50

山田さんが大阪へと出発した。残った OB の佐々木さんと上田さんは今日は、現役とは別行動だ。

OB さんたちは、小窓雪溪から池ノ谷カリー、池ノ谷乗越、長次郎谷を下るということだった。

現役は、ハッ峰下半部を行く予定である。いつもの道を登り長次郎谷へ、1,2 のコルへ行くルンゼを探す。これといった確信はなかったが、岩小屋のある沢をつめる。これが大変だった。逆風の岩のために、草津木の尾根の方に取り付いたが、ひどい藪であった。多くの人が入っているはずだから、踏み跡があるはずなので、ここは違うなと感じたが、方向は正しいはずだからと引き返さずに、どん

んいってしまった。しかし、何とかコルにたどり着いた。後で分かったことだが、このコルは、34のコルだったようだ。ルンゼ自体を間違ってしまったのか、今となっては分からないが、ルンゼ自体を間違っていないとすると、左へ左へとつめていったので、最後の詰めのところ間違ったのかもしれない。懸垂下降の練習ができる良い機会だと思っていたが、残念なことに、2峰と3峰の懸垂下降が減ってしまった。

4峰のコルは、しっかりした支点があり40mちょうどであった。懸垂下降中の落石が、怖いということを知った。そんなに歩かないうちに5峰が現れ、Aフェースが見えた。はずかしいことに、実は、このときにはじめて34のコルから取り付いていたことを知った。反省すべきところだ。さらに反省すべきことに、5峰の頭を確認することなしに、はっきりついている踏み跡を何の迷いもなしに、たどってしまったことだ。結果として、10mの懸垂を2回しただけで、大丈夫だったが、ガイドブックでは、40mが2回と書いてあるので変なルートで56のコルへ降りてしまったようだ。

56のコルから長次郎谷に下ると、長次郎谷に下ると、「ヤホーハイ」のコールが聞こえる。熊の岩のテンバ近くにあった上田さんの声だった。さらに長次郎谷の雪渓を下ると、佐々木さんがいた。小窓の雪渓がズタズタで、長次郎谷の方に遊びに来たということだった。

無事テンバについた後は、僕と小椋君は川に行き水をかぶりたりして遊んだ。非常に冷たく数秒しか浸っていられないほどであった。そのあと、雪渓に埋めて冷やしたグレープフルーツを食べた。暑く、またみずみずしい果物に飢えていたのでおいしかった。

今日の反省として、当たり前だが、ルートは慎重に選ぶことと、懸垂下降は、もっとすばやく安全に行うようにするということだろう。

8月14日(土) 沈殿 雨

現役の和田君、OBの佐々木さん上田さんが大阪へと帰る。阿曾原から下るとのことだった。残ったのは、僕と小椋君の二人だ。やや

さびしさを覚える。一応、和田君が今日も行動するので、4時の起き、朝食を食べた後、みんなを見送る。その後、2度寝。行動しなくて正解だったと思う。雨は時々やみ晴れ間を見せたりするものの、断続的に降り続く。ごろごろして、行動していないのに腹が減る。行動食を食べ、本を読んだりしてすごす。行動しない贅沢を満きつする。

8月15日(日) 再び沈殿 午前中は雨、午後は曇り時々晴れ

夜中もずっと雨が降り続き、朝起きた4時の時点でも雨は止まず、沈決定。しかし、8時ごろには、雨があがり、回復の兆しがでてきた。こんなことでは、行動すればよかったと思うが、いまだ動く気もない。小椋君と花札で「こいこい」をして、時間をつぶしてすごす。2日目の沈となるとすることもなく、だるい。

4時19分ごろ天気図をとっていると、ヘリコプターの爆音が妨害する。何やと思って外に出ると、すぐ近くでヘリコプターがババリングしていた。遭難者だろうか、人を二人乗せて、立ち去っていた。2人とも歩いていたので、たいしたことはなさそうだった。

8月16日(月)

真砂沢一池の平小屋

場所	到着時刻
真砂沢	
二股	6:55
休憩	7:40
分岐	8:32
池の平小屋テンバ	9:15

4時に起き、外を見ると星が見えず、曇っているようだ。今日も天気は悪いのかと思っていたら、出発する時には晴れた。今日の行動時間は4時間だから、ゆっくり行く。雪渓が解れているために、真砂を出てすぐのところに、高巻がなくてはいけなかったところがあった。

ったが、瞬間に二股につく。三の窓雪溪やハッ峰が見え、いい景色だ。それからは、仙人新道を登る。途中で、八木さんの知り合いという佐々木さんにばったり出遭う。二沈明けで、しかも久しぶりのフルザックはややこたえたが、この仙人新道のコースタイム2時間半のところを1時間半で行けた。途中、実をたくさんつけた黒豆の木が、僕たちをよろこばしてくれる。

池の平小屋には、9:15に着いた。これでは、半沈である。小椋君のテントを張った後、平の池を散策し、その後ビール(600円)を買う。うまい。気持ちいい。景色や人の少なさもあいまって、最高だった。

隣にテントを張ったお姉さんから、明日から天気は下り坂という情報を聞き、どうなるのか心配だ。

8月17日(火)

池の平山と池の平小屋―真砂沢 終日雨

場所	到着時刻
池の平小屋テンバ	
池の平山山頂	7:30
池の平小屋テンバ	8:30
仙人峠	10:22 通
二股	過
真砂沢	11:12
	12:23

3時半に起きたものの、いつもより暖かく、どんよりと曇っているようだ。朝食を食べていると、結構強い雨が降り出す。今日の北方稜線中止を決定。しばらく二度寝をしていると、雨がやむ。そこで池の平山までは、せっかくだから行こうということになる。出発して、しばらくすると雨が降り出す。上に行くほど風が強くなり、雨が激しくなる。北方稜線をあきらめて、良かったと思う。ガスのため頂上がどれほど半ばしなかったが、ここがおそらく頂上だろうというところで、引き返す。雨の中撤収し、下山する。途中、仙人峠で仙人新道へと下る分岐を見逃し、仙人池ヒュッテまで行ってしまふ。うっかりしていた。川は、やや増水していたが、問題なく真

砂沢のテンバにたどり着く。テンバは数日前がうそのように、テントが少なくなっていた。2張りぐらいしかない。テントの中も少ない。6テンで2人というのは、広いものだと、改めて思った。

明日の天気や黒よんへのルートを聞きに小屋へいくと、台風が近づいていて、天気は20日まで回復しないとのこと。黒よんへのルートは、行けないことはないが崩壊していてしんどく、やばいから勧めないということだった。ありがたいことに乾燥室を使わせていただくことができた。

いろいろ話して、小椋君は縦走をやめにして、ぼくは黒よんに下ることをやめにし、明日一緒に室堂から富山へ下り、あさってに18切符で富山から大阪へ帰ることにする。

8月18日(水)

真砂沢―別山乗越―雷鳥沢―室堂―富山駅
ガス、風強し。

場所	到着時刻
真砂沢	
平蔵谷出会い	6:47
休憩	8:05
休憩	8:30
剣沢小屋のあたり	8:55
剣御前小屋	10:17
雷鳥沢	11:26
室堂	12:30
富山駅	16:45

長い間、お世話になったテントを撤収し、出発。非常にザックは重く、風強し。剣沢小屋の下の辺りから風が強くなり、ガスも濃くなり、寒い。踏みあとがたくさんあるからどこに進んでもいまいち分からない。なんとなく進んでいると、別山のほうに進んでいた。やや、時間をロスした。別山乗越からの下りは、快調だった。一本で行けた。地獄谷の階段が、最後の難関だったが、休みつつ登り、ついに室堂へ到着。富山駅へ直通のバスがあることを知り、それを使う。

富山駅で、打ち上げの食事をしたが、その時のぼくたちは、10日間ほど風呂に入っておらず、自分でも分かるほど、臭くなってい

たが、そのため、ある意味いい経験ができたように思う。

飯屋をはしごし満腹になったあとは、インフォメーションで風呂を尋ねて、風呂に入る。満ち足りた一日を終了し、富山駅前で寝る。

付録（今回の山で見られた花々）

雷鳥沢のデンノバで

ミヤマアキノキリンソウ、チングルマ、オンタデ、オトギリ、ウサギギク、ハクサンボウフウ、イワイチョウ、ミヤマハタザオ、ミヤマアカバナ

真砂沢のデンノバで

タチスボスミレ、イワツメクサ、ミヤマダイコンソウ、ベコバナイチゴ、サンカヨウ、カラマツソウ、エンレイソウ、アラシグサ、キヌガサソウ、ミソガワソウ、マイズルソウ
登山道などで

カライトソウ、アオノツガザクラ、ツガザクラ、ホツツジ、クロマメノキ、イブキトラノオ、ヨツバシオガマ、エノシオガマ、ミヤマリンドウ、タテヤマウツボグサ、ハハコヨモギ

現役 和田君の合宿感想

8月8日（日）、前日全て荷物を詰めて動いてみた限りではある程度は動けるかなと思ったんですが、部長の物凄い量の荷物を僕も少し持つことになり、歩くのが格段にきつくなりました。この日はあっさりと雷鳥沢にたどり着き行動が終わったので良かったんですが、明日は大丈夫なのかと思った初日でした。

8月9日（月）、やはり重い荷物を背負ったの行動はかなりきつかったです。いくら休憩しても10分くらいすると重みが膣にのしかかってくるような感じでコロコロと体勢を変えながら歩いていました。最後は真砂まであと5分という表記を見てからかなり長くうんざりしました。

8月10日（火）、平蔵雪渓から剣本峰へ。山に来ると普段から少ない食欲が余計に少なくなつて辛いんですが、前日の晩とこの日の朝が一番辛かったです。結局少し残して部長に食べてもらうことになりました。部長は

「そんなに遠慮せんと（もっと食べたら）」とよく言っていました。はっきり言って僕はこの点に関しては全く遠慮はしてなかったです。この日から重い荷物を持たなくていいということでこの日は割と楽でした。しかし雪と岩の連続は歩きにくくてかなり嫌でした。この日一番怖かったのは一般縦走路で最後の山頂にたどり着く前のチェーンのところ。ただでさえヤバそうだったのに手がツルツル滑って大丈夫なのかと思いました。昼の行動食の量を抑えたので、この日の夕食（炊き込みごはん）はかなりおいしく食べられました。これが一番僕にとっては良かったです。

8月11日（水）、八つ峰後半でしたが、この日はみんなが岩登りをするのを上堂さんと二人で八つ峰5、6のコルで見学することになりました。確かに暇でしたが、疲れもあったので良かったです。

8月12日（木）、この日の源次郎尾根は木が多くて、はっきり言って雪と岩にうんざりしていたので新鮮で良かったです。2峰懸垂のところでは部長に何度も注意されて結局大幅に時間をロスしてしまったので申し訳なかったです。8月13日（金）、八つ峰下半で、この日は最初は深い藪の連続で疲れたというよりイライラしました。後半は懸垂の連続でここでも昨日同様とてつもなく下手くそで申し訳なかったです。

8月14日（土）、阿曾原経由にて帰れるということで気持ちはかなり乗っていました。部長の話ではそれほどきつい道のりではないということだったんですが、全然そんなことはなかったです。確かに仙人新道は登りの連続でしたがどちらかという僕の好きな山という感じで良かったです。しかし問題はその後でした。雪渓が細り大きな高巻きの連続で、なかなか阿曾原にたどり着かず結局8時間以上かかってフラフラになってしまいました。8月15日（日）、樺平までの最終日は平らな歩きやすい道の連続で5時間かかりましたが、8日間の中で一番良かったです。最後の下りではかなり足が痛かったのでなんでなのかを考えていたら足の皮がめくれていたのが原因でした。しかし大きな傷は負わずに帰って来れたので良かったです。

ヒマラヤ2人旅

(2004/10/2-10)

佐々木惣四郎

<ピサン、チュルイーストを目指して>

ここアンナプルナ周辺マナンにネパールシェルパ(ダルジー43歳)と日本シェルパ佐々木が10月2日-10日に合宿しました。モンスーンが明けきらず雨と雪に迎えられました。

10月2日、麓の部落ピサン3100Mより4100MにBCを設け、4800MにHC(ハイキャンプ)を設け上方を偵察の結果、ピサンピーク6091Mは3日間続いた新雪で5200mから続く逆層スラブ高度差500Mを乗り切る事ができず撤退を決意し5日部落に下山。



ピサン・ハイキャンプよりのアンナプルナ2峰

10月6日、次の目標チュルイーストの部落ホンデ3300Mに移動。BCを4700Mに設け、5100MにHC1を設け、5400MにHC2設定すべく到着して初めて登頂ルートが眺められた。つくづくルートを眺めたが、チュルイースト6558Mは、HC2から氷河に一旦下ったあと、3級レベルのガ

レ尾根高度差約700Mがあり、最終HC2の5400Mから10時間以上に及ぶ登はんが予想され、高度に自信がつかず断念!

結局、当初の2峰が駄目となり隣のチュルファーイースト6059Mの登頂に転向して同日一旦HC1にもどり、すぐにチュルファーイーストにハイキャンプを設定に出かけ5300Mに設定。

10日 朝3時半起床、6時ほぼマイナス13度の寒気の中出発。約30度傾斜の雪面が続き9時45分登頂に成功。1番ランナーで3時間45分で成功する事が出来た。

今回の敗因は1人という心理的なビビりが表面に出た為といえます。高度順化には問題なかったが、地球の加重の重さを感じさせられゼイゼイハアハアの9日間でありました。

なお、ネパールシェルパは優秀であって、ついて行けきれなかった事になります。どこでもシェルパに見られた日本シェルパは、敢え無くビビリ6500Mの壁に辿りつけませんでした。

やはりヒマラヤの7000-8000M峰は、迫力十分でアンナプルナ主体に、ガンガブルナ、チリチョ、ニルギリ、マナスル、P29、ヒマルチュリ、マチャブチャレ、ダウラギリ等々は、豪快で感動的でありました。

参考に今回の2峰は、テクニカルな山で成功する隊は極めて少ないとの事であり、チュルイーストは、イギリス隊1名がシェルパ2名(エヴェレスト登頂者)を伴い、11日12時間かけて成功していました。

<アンナプルナ周辺トレッキング>

9月26日出発地のベシサハール760Mをシェルパ、コック、キチンボーイ、ポーターの8名と出てチャーメ、ピサンに至るも(5日目)モンスーンが明け切らず雨多く、景色はほとんど見られず登山活動に入って始めて雄大なアンナプルナに接しられた

登山活動後は、シェルパ、ポーターとの3人になりマナンに至り、雪明けの朝、その素晴らしさ感動!アンナプルナ連峰、ガンガブルナ、チリチョ等がバッテリー(ロッジ)の真前に展開していたのである。

このルートのハイライトはマナン、トロン

ベディ、トロンパスであり、その他はこれとての実感は少ない。ただ、トロンパスは5400Mであり、雪明けの峠越えであったが、それなりにしんどい登りであった。何人かは、越えられず引き返していた。

峠を下るとムクチナートという聖地でダウラギリ1峰が堂々と聳えている。ジョムソン2700Mまで2700M下山する事になる。ジョムソンからはニルギリ北峰がさえる。ボカラまでの飛行機は、なかなか難物でイライラしながら順番待ちが必要であったが幸いにも早くのれ17日中にカトマンズに帰れた。

トレッキングの醍醐味は、7000-8000M級の雄姿に接しられる事がポイントの1つであるが、この点からすると街道を巡るだけでは、満足は得られないと思う。山に登らなくてもベースキャンプにゆくと、5000Mぐらいからの迫力は全然違うのである。つまり、ベースキャンプ巡りをプランに入れると、4000M越えとエーデルバイスも見られ充実感がアップし、素晴らしい写真も撮れると思う。ただ、ある程度ハイキングになじんで歩いている人でないとやはりつらいと思われる。



チュルイースト頂上、氷河より側壁を登る。

<トレッキング中の出来事>

シャワーがバッティには備えられており、冷たいと思いきや暖かい湯が出てきてビックリ。ソーラーで暖めて出てくるのである。無料の場合と有料があるようである。便所は、エベレスト街道のクーンブ地方より完備していて水洗方式であった。また、羨ましいぐらいに子供が多く、どこのバッティでも小さな子供が元気に遊びまわっていた。

ビサンではシンガポール隊の5名と一緒にベースキャンプで、彼等も小生がリタイアしたので同じくリタイアして、かれらはチュルウエストにそのあと向かい、13日成功したあと、ジョムソンに至るまで相前後してずっと一緒だった。若いグループで2山巡りは小生と同じで散々交流を持った。逆に、日本人にあったのは唯1人だけでネパールに住む64歳の女性で北農先輩と親交のある人であった。

1人旅は気楽といえば気楽であるが、長い夜、長い休憩といかに過ごすかが課題であり、小生の場合、モッバラ、カセットレコードを聞く事で石川さゆり、五輪まゆみ が中心で毎日2時間近くは聞いていた気がする。カセットは必携である。特に、沈殿は1日だけであったが、お喋り相手はシェルバだけで、1人人生の棚卸をイロイロとする事になる。約1ヶ月の旅であったが、早くも次の旅が待ち遠しい。



高度5400mのトロンパスよりムクチナートへ下る。ダウラギリ主峰の雄姿を仰ぐ。

紅葉を訪ねて

黒部源流の山を歩く

(折立・・太郎山・・黒部五郎岳・・
・・三俣蓮華岳・・双六岳・・新穂高)

鷲田英毅 (1964年卒)

黒部五郎岳のカール

期 間 2004年9月22日～
25日
メンバー 鷲田ほか女性3名(女房、友人)

9月22日(水)(くもり)

前日の夜、車で大阪を発ち朝6:00に有峰道路ゲートが開くのにあわせて折立に入る。いまにも降りだしそうな曇天に加えて睡眠不足のせいかみな不機嫌そうに歩く。登山道はすばらしく整備されており、昼過ぎに太郎平小屋に到着。太郎平小屋泊。

9月23日(木)(ガス、時々雨)

濃いガスのなか源流の山々の縦走に出発する。太郎山、北ノ又岳、赤木岳となだらかな稜線が続くものの眺望はきかず足元に広がる草紅葉に秋を感じるのみ。

黒部五郎カールに行く

中俣乗越から黒部五郎へ高度をかせぎ、肩から頂上を往復してカールを下る。カールの紅葉は今回の山行中最も見事であったが全景が見えないのが残念だ。黒部五郎小屋はこじんまりした良い小屋で丁度改修中、玄関の横には立派な冬季小屋が新築されていた。この日はガスと強風のためか10時間の行動となった。黒部五郎小屋泊。

9月24日(金)(曇り)

小屋の前からだけかんばのなかを300mほ



黒部五郎岳のカール

ど登ると三俣蓮華へ伸びる広い稜線にでる。北方向の視界がひらけ、眼前に雲の平、岩苔乗越を経て水晶、赤牛の稜線、遠くに立山、剣を望むことが出来た。

祖父岳と鷲羽岳、赤牛の稜線

三俣蓮華から双六へは稜線ルートを行くも、途中からまたしてもガスと強風にあおられ最後にはどしゃぶりに追い立てられて双六小屋に飛び込む。双六小屋泊。

9月25日(土)(晴れのち曇り)

夜中から朝にかけて猛烈な雷雨だったが出発をすこし遅らせ晴れ間を待って小池新道を下山にかかる。弓折の稜線では槍、穂高の景色が望めたものの鏡平で芸術写真をとっていたらまたまた濃霧でだめ。

弁当をたべて温泉とビールの待つ新穂高へと急いだ。女性をご案内する気楽な小屋泊りの山無事下山。



黒部五郎のカールに行く

ヒュッテ雪線のリフォーム

久保田 淳三

1997年に駒ヶ根に山荘を建設以来、多くの会員やビジターが山荘を訪問されました。近くに「こまくさの湯」があり、近年には徒歩で行ける「こぶしの湯」も出来て、山荘の浴槽を利用する人は少なく。風呂場のスペースを有効活用する話しが起きました。従来の食器棚や本棚のスペースをなくせばリビングが広がる。

10人以上の人が利用するときトイレが一つしかなくトイレの増設と汲み取り便槽を浄化槽に変更する案も提出されましたが、年間10人以上の利用は3件ほどであり、浄化槽からの放流水を流せる水路がなさそうなのでトイレ関係は現行のままで行くことに決まりました。

また2階の寝室にはザックなどを置く場所がなく上着をかけるものもなかった。

このような改装の意見が会員の中から出て幹事会で正式に工事の着工が決まりました。

.....

かねてより懸案の改装は去る2004年9月18～20日。2日の工程が浴室の撤去と床、壁の造作に手間取り、丸まる3日かかってしまいました。

1、浴室の撤去／浴室のあとに食器棚、書棚を納め、冷蔵庫吊戸はキッチンと並んで設置。以後訪問される方は、ダイニングルームの広さとスッキリ感に驚かれることでしょう。ゆったりとお過ごしください。

2、2Fの両室に棚とフック設置／160～170cmの高さに棚を取付けその下部に衣服、小物掛けのフック（全20ヶ）を取り付けました。これで寝室も広く使えるようになります。

3、2Fバルコニーに物干設置／4.2mの物干竿（ステン製で伸び縮みタイプ）2本使えるようにしました。これからはフトン、毛布、洗濯物をどんどん干してください。不要のときは竿は室内に保管ください。

4、オーディオを買い替えました／ビクターのDVD、CD、MD×2、カセットが使えるミニコンポで、3スピーカー×2の高音質を存分にお楽しみください。テレビ放映は見れませんがお手持ちのDVDソフトがあれば映像は楽しめます。

楼蘭故城を訪ねて

(記) 中嶋信正

はじめに

Retire 後のボケ防止に役立てばと、3 年程前から「NHK 文化センター」の「シルクロード」を聴講している。毎年 2 回程、講師の大阪教育大学教授の休暇を利用して、講義に関連するシルクロードの各地へのツアーが計画されている。この度、夏季は極暑の為困難な、砂漠の真っ只中に残る「楼蘭故城」を訪ねるツアーが催されたので、シルクロードに興味を持って以来、自分の足で立てると思ってもいなかった所だけに、体力的にも最後のチャンスと考え参加した。



楼蘭故城の仏塔跡

楼蘭について

楼蘭は中国・新疆ウイグル自治区のタクラマカン砂漠東端、さまよえる湖「ロプノール」の湖岸に 2000 年程前、シルクロードの重要拠点として「匈奴」・「漢」の間に位置して栄え、又その為に困難な政策を強いられたオアシス王国であったが、湖水の枯渇や「漢」の圧力による弱体化、更には天山山脈麓の新しいルートが開けた事とも重なってその位置付けを急速に失い、鄯善国となってその首都も変わり、6～7 世紀頃まで存在していたが、やがて廃墟と化し、歴史から消えてしまった。

その後、19～20 世紀に懸けてスタインやヘディン、更には日本の大谷探検隊等が行った中央アジア探検に際して遺跡が調査され、その存在に光が当てられた。更に近年、中国の地下核実験場としてロプノール近辺が利用され、軍事機密が絡んで楼蘭へ近づく事も厳しく制限されていた。

又最近、付近の古墳から彩色壁画や彩色木棺が発見され、描かれた人物像の衣類・持ち物、更には家畜類から、当時の東西交流の様子を示す、貴重な物である事が明らかになっている。

旅行記録

日程	2004年3月16日～3月27日		
メンバー	(長)	大阪教育大学教授・山田勝久氏	
	(参加者)	9名(男性；5名、女性；4名)	
	(添乗、案内)	日本旅行；弘中氏、中国・西部国際旅行；黄氏	
	(現地スタッフ)	運転手、コック等；7名	
使用車両	合計	日本側；11名、中国側；8名	
	中国製 DONG-YUNG 大型六輪駆動トラック	1台	
	トヨタ ランドクルーザー	4台	

3月16日(火)

日本側11名が関西国際空港に集合、新疆大学への留学生1名も加わって、10:20発 JL785 便で定刻出発。北京 12:40 着(現地時間)、3時間余りの快適な飛行。入国手続き後、現地旅行社の案内者・黄氏と落ち合い、2時間30分遅れの国内便でウルムチへ飛ぶ。(CZ9102 便 B-767 機で快適) 中国・国内便は液体類の機内持ち込み制限をはじめ手荷物検査は厳しく、私はトレッキング・シューズを脱がされて、それをX線検査された。又、便数が少ないのか、中国経済の発展に伴うものか判らないが、満席で帰路も同じ状況であった。

ウルムチ 21:30 着、4時間30分もかかり日本よりも遠い。ウルムチは人口250万の大都会、マイクロバスで今夜の宿「城市大酒店」へ。チェックイン後、隣のラーメン屋で新疆ビールとラーメン(ギョウザも食べたかったが、ギョウザ屋へ行かないと食べられない)の遅い夕食となった。

(1)

ビールは軽快な味で美味かったが、ラーメンは辛い上に馴染みの無い味付けで、麺も腰が無く、お世辞にも美味いとは言えなかった。シャワーを浴びて25時就寝。

3月17日(水)

中国全土が北京標準時間の為、ウルムチの如く北京より遠く離れた所では実質3時間近くの時差が生じ、朝の8時ではまだ真っ暗、8時半になってやっと明るくなって来る。

本日より中国側スタッフと合流し、以後その車で移動する(帰路3月26日ウルムチ空港へ着くまで)。10:30 ホテル出発、山田先生と交流の深い、新疆大学を表敬訪問。新、旧学長が出席しての懇談、と1名の日本側新規留学生の紹介・引渡し。その後、構内の民族博物館を見学、調査を待つ貴重な発掘資料も多く展示されていた。続いて自治区博物館を訪ね、「楼蘭の美女」と呼ばれるミイラとご対面。他に10体程展示されているミイラと比べ、顔の皮膚に張りがあり、若くて鼻筋の通った、整った顔立ちが、生前の美しさを髣髴させる。但しこのミイラは楼蘭から少し離れた町「ハミ」から発掘された。従って展示説明に「眠れる美女」とあるが、この方が正しいかも。

市内のレストランで昼食後、トルファンに向け出発。途中「達坂城遺跡」を見学し、「交河故城」に18時過ぎに到着、1時間半程見学するもまだ十分に明るい。

今夜の宿「トルファン賓館」にて夕食後、大教大への留学生(2児の父親)の親の家に招待された。

街灯も無い真っ暗な細い路地の奥にある、日干しレンガ作りの典型的なウイグル様式の平屋は、裸電球1つがぶら下がるオンドルのある客室と、奥にある台所らしき所以外は暗くて見えないが、決して恵まれた環境にあるとは思えず、この中で留学生を送り出す力はどこから湧いてくるのか？更に今春、彼の妻も子供を両親に預けて、同じく日本に留学する事になっている、と言うが、

国情の違いがあるとは言え、私には少し理解し難い事であった。

真夜中近くにもかかわらず、ご馳走と民族舞踊の大歓迎を受け、24:30 ようやくお開きとなる。



ヤルダン（風化土堆群）に囲まれた「龍城」での食事。3/18～19の2泊

3月18日（木）

指定された車に各自の荷物を積んで分乗（3人／1台）し、10:30 出発。我々の車の運チャンは丸刈りの若くて元気なマ（馬らしいが略字しか知らない）さん。

カレーズ博物館を見学後トルファンの町を離れ、火焰山を見ながら荒野に石油井が点在する国道312を進み、川向うの荒涼とした岩山の麓に「勝金口千仏洞」を遠望する。ここで国道を離れて一般道へ入り、畑の広がる村を縫って吐峪沟へ。近くの町で先導兼輸送車の大型トラックと合流し打合わせの結果、ウルムチからの連絡で、我々に先行して「自治区文物保護局員」随同行の映画撮影隊が楼蘭に向かった様で、その間楼蘭へは立ち入り禁止となった模様。彼等の撮影後に素早く楼蘭に入れるよう、本日の「梧桐溝（ゴドゥカウ）」テント泊予定を変更し、明日のテント泊予定地「龍城（リュウジョウ）」まで一気に進むことになった。

「吐峪沟（トヨコウ）千仏洞」へ着くも番人が居て、5月1日まで見学不可との事。仕方なく川向こうに見える斜面に、日干しレンガの家々がひしめく吐峪沟の村を眺めて引き返し、町の食堂で「焼きうどん」の昼食。これは羊肉とたっぷりの野菜（赤とうがらしもたっぷり）を油で炒め、そこに茹でたうどんを入れて絡めた、辛いが野菜たっぷりの美味しい焼きうどん。

14:20 出発、途中「魯克沁（ロクチェン）」の町で給油し、いよいよ何かに掴まないと頭を天井にぶつけそうな道を、車を連ねて最果ての町「リカル」を 16:00、通過し、クムタグ砂漠に突入する。

（2）

ここまで畑の中や村々を通り過ぎて来たが、季節が季節だけに緑色は全く目に入らず、近くの岩山は勿論、目に入る物の殆どが土色の、モノトーンの世界である。

しばらくは、乾いた広い河床に転がっている石を避けて、通り易い所を縫って走る轍を辿る道だが、意外な事にすれ違うトレーラーが多く、積荷は切り出された石材か鉱石が殆どで、その度に我々軽量車は道を譲って脇に避けて走る。この頃になると、後ろに積んだスーツケースが、しょっちゅうドカンドカンと床に叩き付けられるようになってきた。

17:30、河床が開け、低い山の間に広がる砂漠の一軒家(司机之家・ドライバーの家)で、パンク修理。こんな所に住む人が居たとは驚きだが、交通の要らしく行き交うトレーラーが結構多い。

ここで初めて、レンガ作りの小屋に掘った穴の上に、数枚の足場板を渡しただけの、中国式共同トイレの洗礼を受ける。男女の仕切りは在るが、その中はドアは勿論、間仕切りも何も無く、下はうず高いウンチの山で強烈な臭気。女性は大変だー。

19:00 [梧桐溝(ゴドウカ)] (と言っても何の目印も無い、礫混じりの砂漠の中)にて初めての夕食キャンプ。車を風除けにして冷たい風の吹く中、直径 1.5m程の円テーブル兼調理台で、コックを中心に大きな中華包丁を器用に使い、中国側スタッフ全員が協力して、男手ながら器用に手際良く調理している。白麵と、野菜をたっぷり使った炒め物主体の食事で、辛いが味付けが良く美味かった。(強烈な火力のプロパンバーナー使用)

夕食後、漸く暗くなった 21:30、真っ暗な砂漠にヘッドライトを連ねて「龍城」目指して先に進む。この先はただヘッドライトに照らし出される、砂埃に見え隠れする先行車の姿と轍を、いよいよ激しくなってきた絶え間ない上下左右動に耐え、車のハンドグリップを握り締めて凝視するのみで、どんな所を走っているのか、真っ暗闇でさっぱり判らない。

22:40「イルタレグチ鉱山」通過、未開の地に突入。此处までは遠くに時々明かりが見えたりしたが、以後米蘭(ミラン)検問所通過までの丸 4 日間、対向車、人間は勿論(待合せ予定の人は別として)、生き物との遭遇は一切無かった。先導のトラックを見失ったり、GPSにて悪路の迂回路を探索したりして、真夜中の砂漠を時には宙に浮きながら進み、04:00 には核実験エリア(破壊された実験建築物の残骸を見た人も居る)を通過したらしい(我々には判らなかった)。05:15 ヤルダン(風化土堆群)の中の「龍城」に到着。ここも何の目印も無い。

車内にて周囲が見通せる明るさになるまで仮眠(寒くて眠れず)。再度若干移動し 08:15 テント設営。カップラーメンとパンの朝食の後、(3月19日)10時過ぎより就寝。

3月19日(金)

久しぶりの寝袋・テント泊だったが、エヤーマットに綿掛布団とデラックス。疲れもあってか気持ち良く直ぐに熟睡、暑くて目覚めると 14 時頃で天気は良く、外気温は 23 度にもなっていた。

ウルムチからの衛星電話により「今日は終日動くな」との指示があり、白飯、レバー、玉子・トマトのスクランブル、ジャガイモ千切り炒め、きのこ炒め、と豪勢な昼食の後 16 時頃より付近のヤルダンを散策。礫の中に「玉石」でもないかと皆目を皿にして探すが、そもそも本物を良く知らない我々には無理で、その内に「何かの骨が埋まっている」との叫び声で駆けつけ、掘ってみると、層状に固まった塩だった。ヤルダンの間の砂礫砂漠は、以前は川もしくは湖の底だったらしく、砂礫のすぐ下は固い塩の層になっていて、シャベルで更にその下まで掘ろうとしたが、シャベルを殆ど受け付けなかった。

ウルムチからの指示で「明日の昼以降、楼蘭に入れ」との事なので、ここでもう一泊する。夕食は時間に余裕があるので手間を掛けて、豪華夕食(炒めうどん、ノリときゃべつのサラダ、生キュウリにみそ、羊肉とニラの炒め物、)となる。21時頃より、外気温が10度以下に下がってきた中で、防寒衣に包って、熱い食事に、缶ビール、ブドウ酒、白酒、も出て満腹した。

後は各自トイレに散って、テントに潜り込むだけだが、これが要注意で、夜中一人で出て少し遠くに行くと、テントに明かりが無く、周囲は同じ様なヤルダンの崖が並び、しかも漆黒の闇の為、方向が判らなくなり、テントに帰れなくなる恐れがある。現にテントが見つけれず、明るくなるまでトイレ地点で寒さに震えていた人が居たらしい。

3月20日(土)

朝4時、まだ真っ暗な中トイレに出、暫くしてテントに戻って間もなく、パラパラとテントを打つ音がした。雨だと思ったが、こんな砂漠の真っ只中では信じ難い事だった。9時起床して見るとテントのたるみに水が溜まり、中にも少し入っていた。雨は本物だった。

朝食後、10時~12時まで自由時間。晴れ間が抜がる事は無く曇天だが、歩くのには支障はなさそうなので、少し遠くまで歩いてみる。後ろを振り返ってテント場への帰路の目印を確認し、目に焼きつけながら北の方向、遥か天山山脈らしき山並みが霞んで見える方へ、道連れとなった2人と共に先の景色を期待して、ヤルダンや砂礫の連なりをカメラに収めながら30~40分も進むが、先はどこまでも同じような砂混じりの礫の丘が連なっていた。

ウルムチからの衛星電話で「映画撮影隊が楼蘭を12時頃出発し、1時間ほどで我々のテント場の遠くない所を通過するだろう」との情報を得る。

13:30 から昼食の後テントをたたみ15:00 出発。いよいよ楼蘭に向かっての行動を再開す

初めは砂礫(ゴビ)の走り易い道(轍)も、針金の張られた「楼蘭文物保護管理区」に入るとだんだんと悪くなる。若羌(チャクリ)県文物保護局員と合流し楼蘭古墳群(土根遺跡)へ16:00到着(ここで彩色壁画、彩色木棺等が発見された)。その後局員と別れ、楼蘭故城へ向けて枯れたブッシュが生えている砂地の凸凹道を進み、途中、楼蘭方城を見学。葦やブッシュを土で固めた、一辺がおおよそ200~250mの、四方を囲む崩れかけた城壁が面影を残すのみであった。

この先は小高いヤルダンの間の柔らかい砂の轍を、砂に自由を奪われてもがきながら、互いに助け合って脱出したり、勢いをつけて砂の急坂を登り直したりしながら進む。こうなると中国側スタッフ全員が、時には車を降りて、砂まみれになって走り回り、何度か経験しているらしいこの道を、如何に乗り切るか、プロの面子に掛けている様子が、頼もしさが感じられる。

この様な、大地が風砂に依って溝状に削られた風蝕地帯を、時速10Kmも出せずに進む内に暗闇となり(21時)、ヘッドライトを頼りに進む事2時間、楼蘭までもう少しだと云うが、今度は岩礫地帯に入り込み、暗闇で見通しがきかない為、先導トラックの二人が懐中電灯を頼りに徒歩で誘導したりして、GPSで確認した楼蘭を目指すとその位置が特定出来ず、23:45野営を決定。

[N ; 40° 30' 44" 1 E ; 89° 41' 07" 1 H ; +735m]

冷たい強風が吹き付ける為、車を寄せ合って風除けとし、防寒着を着込んでテーブルを囲んで簡単な暖かい夕食(麺)を食べたのが25時、早々とテントに潜り込んだ。

3月21日(日)

まだ薄暗い8:15 起床、気温3℃、テント場は遮る物が全く無い砂砂漠の中。吹き付ける強い

(4)

風に砂が流れ、飛ぶ。砂嵐の接近も心配され、インスタントラーメンで朝食を早々に済ませて 10:30 テントを畳み出発。強風で所々掻き消された昨日の轍を辿って途中まで戻り、再度楼蘭への道を進む。天候は回復し晴れ間も見えてきたが、以前は森林もしくは草原地帯と思いき枯荒野の中を、古い一本の、微かに残る轍の、柔かく深い砂に悪戦苦闘しながら進む事 3 時間、ついに 13:20 楼蘭故城の崩れかけた烽火台に到達。ここでは古銭や古陶器片が見つかることがあり、全員付近を捜しまわる。銅製指輪の破片や古銭が見つかった。遠くに見えている、目指す仏塔の所まで更に 30 分、14:00 とうとう楼蘭故城遺址に到着。

[N ; 40° 30' 51" 9 E ; 89° 54' 34" 8 H ; +754m]

空も晴れ渡って暖かく、気持の良い、散策には絶好の日和となった。簡単に入り込める鉄柵を周囲に巡らせた広大な遺址に入り、約 1 時間散策する。

少し離れた所に聳える、写真で見覚えのある仏塔の方へ、白い骨片が砂に埋もれて散らばり、木の柱や朽ち果てた葦の囲いが残る、小高い住居跡を通り抜け、古い土器の破片を拾いながらゆっくりと歩く。青空の下、仏塔の基に立つと、「遙けくも来たもの!!」と感無量となると共に、ここに人の営みがあった事が、信じられない思いだった。仏塔は明らかに人工の建造物と判るが、2000 年に亘り太陽と風砂に依る侵食に遭い、崩壊寸前の様相で、長い木材の付っかい棒が見られる。

もう少しゆっくりしたかったが、制限時間が近付き、車へ引き返す。

15:30、コルラ産の梨とクラッカーの昼食を食べながら、ロプノール西岸目指して出発。来た道を少し引き返し、2 時間程同じ様な深い砂の轍を、先を確かめながら辿ると、砂が浅くなりロプノール湖底へ出たようだ。左手遠くに天山山脈を望み、東に向かって一直線に延びる、路肩に岩塩の大きなブロックを並べて、目印としている塩の道を、更に 30 分程進み、まだ陽の高い、18:00、道脇の砂の窪みの平地を今夜の宿営地とする。

[N ; 40° 34' 41" 4 E ; 90° 09' 02" 6 H ; +724m]

ここは北に遥かに天山山脈が霞んで見えるのみで、他は全て遮るものの無い大地が地平線まで広がっている。又、周辺の塩を含んだ硬い砂地は風砂に削られて、丁度砂丘の風紋と同じ、きれいな模様が付いているが、今にも手を切りそうな、鋭いナイフエッジとなっているところもある。

20:00、楼蘭故城到達成功を祝して乾杯の後、羊肉とキャベツの炒め物、トマトやニラの卵とじ、等々盛沢山の手間を掛けたご馳走が出され、酒も入って歌の交歓まで始めた。中国側は勿論全て中国語で歌っており、その中でロシア民謡「トロイカ」、日本の「北国の春」ぐらいは判ったが、他はリズムの良い歌が多かったものの、中身はさっぱり判らなかった。

昨夜は遅かったので、21:30、就寝。この夜の冷え込みは、それ程では無かった。

3 月 22 日 (月)

昨夜は睡眠時間も充分で、まだ夜明け前の 8 時起床。気温 0℃。ナンと大根・人参入り骨付き羊肉スープで手早く済ませ、10:20、快晴の空の下、一路ロプノール湖心を目指して出発。岩塩が踏み固められて走りやすい、一直線に東に延びる旧湖底の道を、朝日に向かってかなりの速度で走り出す。次に標識も何も無い所の分岐点で、90 度南へ一直線の道を、と最初に磁石を頼りに道を辿った踏み跡、と思われる轍を忠実に辿り、1 時間程で湖心に近い、中国の探検家・余純順の墓標に到着。更にもう一箇所の遭難碑を過ぎて、12:00、ロプノール湖心に到着。

[N ; 40° 25' 35" 5 E ; 90° 18' 36" 1 H ; 734m]

(5)

ここは 360 度見回しても、地平線以外何も目に入らない、うんざりするほど平坦な大地がどこ

までも広がり、しかも快晴で暖かく、爽快な気分となる。しかしこの先の道のりに不明な点も多く、先を急いで10分程の休憩で出発。これまで湖の西半分を走って来て、「湖水」は全く見当たらず、この先更に湖を南西に米蘭(ミラン)に向けて走ったが、結局「湖水」を見る事はなかった。

走り易かった轍も、たちまち、時速10Km程しか出せない、岩塩の波打つ悪路となる。1時間程でこの悪路を抜け、未舗装だが整備された道に出ると、スピードを上げて西へ南へと標識も無いのに道を選んで走る。14:30、には外気は32℃にもなり、朝との気温差は30℃以上、着込んだ衣類を一枚ずつ脱いで調節するが、冷たい風が気持ち良い。15:00、トイレ休憩を兼ねて、コーラとりんご、ソーセージの昼食。

どこまでも平坦な大地を再び走り出して暫くすると、視界が急に悪くなり、砂嵐の黄色い砂に閉じ込められた。車はその中を先導トラックの轍を頼りに、車列を組んで進むが、車の中にも細かな砂が入り込む為、眼や鼻はたちまち土色に汚れる。嵐が去ると左側遠くにヤルダンの蜃気楼が見え、17:30、無人の検問所を通った所でロプノルを抜けて湖岸に着いた模様。19時頃道端に送電用碍子がほぼ同じ間隔で、数個ずつ纏まって転がっているのに気が付くも、何に使うのか？捨ててある物なのか？全く判らない。薄暗くなってきた20:20頃、これまでの行程で初めて見る「水溜まり」の残った川を横切った。

20:40、米蘭(ミラン)故城に到着。崩れかけた城壁が茫漠とした砂漠の中に残っていて、暗くなってきた所為か、うら寂しい。

[N ; 39° 13' 34" 4 E ; 88° 58' 15" 5 H ; 882m]

少し離れた所にある仏塔まで、懐中電灯を頼りに往復した後、暗闇の中、21:10 出発。10分程でゲートの閉まっている米蘭検問所へ着く。砂漠なら他を通り抜けられると思うのに、不可能らしい。私服の警備員との交渉が続き、21:40、やっと通過出来た。(米蘭故城への立ち入りは原則禁止されているとの事で、もしも何か聞かれても、「口を利くな」と口止めされた。)

この先、道路沿いに街灯がぼつりぼつりと灯り、久し振りに人の往来する姿を見かけたが、その村を走り抜けて、簡易舗装された道を砂塵を巻き上げて突っ走る。ライトに浮かぶ道路脇の林が尽きると、道路を横切る砂の山が現れ、再び砂漠に入ってきた様子。23:00、この道路上でテントを張る事になった。直ちに夕食の準備を始めたが、車が通らないのか気になった。

[N ; 39° 26' 54" 5 E ; 88° 28' 31" 6 H ; 749m]



24:00、夕食、テント泊最後の夜になり、残り物を全て使って、豪華夜食となる。(茹麺に好みの具をかける主食に、ソーセージや玉子の入った野菜の炒め物、缶ビール飲み放題)
道路脇の砂地に張ったテントで24:40、就寝。

ロプノール湖心近く。旧湖底は土混じりの岩塩でカチカチ。360度遮る物はナシ。

3月23日(火)

9:30、起床、昨夜は暗くて判らなかったが、テント場は砂漠の中に一直線に延びる簡易舗装道路の上で、周辺には刈り取られた跡の残る葦の株が散在し、水のあった事が伺える。昨夜で大型ポリタンで運んできた水も尽き、今朝は非常用のペットボトルのミネラルウォーターを使ってパック入りの牛乳を温め、ナンとジャムに白桃・みかんの缶詰、と洋風朝食。

11:40、出発、この道を先へ暫く進むと、道路脇に水溜まりが現れ、冬枯れの葦が茂っているのが見えてきた。更に先へ進むが、先導車の偵察に依ると、この先は水に浸かって通行不可との事。

12:30、引き返して迂回する事を決定。先導車の偵察を待つ間、水際に降りて「玉石」拾いを始める。

(6)

15cm程の魚のまだ目の黒い死骸も見つかった。こんな所に魚が生息していたとは驚きだ。引き返して昨夜のテント場を過ぎて暫く戻った所で、野生の鹿の群れを、少し先で二羽の鴨を見かけた。砂漠に入って以来初めて見た野生動物だった。

昨夜走った道を途中まで引き返し、現代の西域南道(砂漠化の進展に伴い、古の道より遙か南に移り、古の道は今は砂漠に埋もれて不明)沿いに在る36兵団の町を通過、一路東に向い15:30チャリクリク到着。給油の後、バスターミナル横の食堂で「焼きうどん」の昼食。

[N ; 39° 01' 49" 6 E ; 88° 09' 57" 5 H ; 835m]

今夜は此処の招待所(中国解放軍の宿舎で、外貨獲得の為に一般旅行者も宿泊可としたらしい)に宿泊予定だったが、ウルムチとの連絡で街に大雪の恐れがあるとの事。時間も早いので「出来るだけ進んでおこう」と云う事になり、宿泊場所をこの先にある34団招待所に変更、17:00 出発。

此処チャリクリクで西域南道と別れ、北に向ってタクラマカン砂漠を横切り、タリム河に沿ってコルラに繋がる、舗装された国道218を行く。今年はタリム河の水量が豊富との事で、道に沿って水面が広がり、その内に小さな橋が架かっていて、道路の左から右へと水が滔々と流れている所を通過した。「これが砂漠の中か？」と、驚かされた。水が見られなくなっても、胡楊の大木が生い茂る林を横切ったりするので、地下には豊富な水脈のある事が覗える。又、1960年代に囚人に築かせ、一時は200kmもあったと云う「世界最長のレンガ道」の、残部も見学した。

20:10 夕闇迫る中、日干しレンガ作りの四周の城壁のみが残る、「吐拉里故城」を見学する。

[N ; 40° 34' 59" 4 E ; 87° 47' 16" 0 H ; 777m]

21 時少し前に34団招待所に着くが街全体が暗闇に包まれている。交渉の間待っていると、突然一斉に街に明りが灯った。時計を見ると21時、どうやら給電制限をしているらしい。少し離れた34団小荷招待所にて宿泊する事になった。

[N ; 40° 38' 57" 1 E ; 87° 41' 34" 2 H ; 793m]

此処は平長家の宿泊施設で部屋にはベッドと、ガランとした別室に洋式トイレ・洗面台・シャワーがある。夕食の後、六日ぶりに体を洗えると期待していたが、シャワーからはいつまで待っても水しか出て来ない。いくら何でも水ではかなわないので、管理人から説明のあった共同シャワー室に行く。トップバッターだったので、湯は出るもののコンクリートむき出しの、何故か大き過ぎる部屋は寒くて堪らなかったが、砂漠に入って以来、ウェットティッシュでいくら拭いても取れない手の土色の汚れや、細かな砂でざらざらになった髪の毛を始め、全身を石鹸で洗う事が出来、生き返った気がした。今夜からテントで寝る事も無くなったので、荷物を整理し直して寝たのは25時だったが、久し振りのベッドに、目覚まし時計のお世話になった朝まで熟睡出来た。

3月24日(水)

7:00、気持ち良く起床、顔を洗い、ひげを剃る、いつもの朝のリズムが懐かしく感じられる。荷物を整えている内に突然電気が消えた。8時丁度、給電停止らしい。8:30 から棟続きの食堂に行くと、曇天のため薄暗い室内にローソクが燈され、その明かりで、おかゆや肉まん等の朝食を、久し振りに寒さに震えることも無く、ゆったりとした気分で食べることが出来た。

9:00 今日はコルラの「鉄門関」に立ち寄り、コルラ泊の予定。曇り空から時々雨もぱらついたが、しばらくは砂漠の中、胡楊の林や枯れ草の残る砂山の間を抜けて、車の往來の激しくなって来た道を一時間程走ると31団を通過する。道路沿いにポプラ並木や果樹園が現れ、灌漑用水路に
(7)

沿って木々に囲まれた耕作地も見られる様になり、砂漠を離れつつある事が感じられる。

11:20 尉犁県塔里郷の、道の両側に並ぶドライバー食堂の一軒にて、羊の丸焼きを一匹分買って、ナンを主食に食べたが、玉子を表面に塗って焼いた表面は香ばしく、非常にうまかった。

[N ; 41° 17' 23" 4 E ; 86° 16' 27" 6 H ; 819m]

12:20 出発、ウルムチより「明日大雪の模様」との報告が入り、高速道路が閉鎖されると帰り着く手段が無くなる恐れがある為、コルラ泊の予定を急遽変更し、ウルムチまでこのまま走る事になった。13:00 にコルラ到着し給油。此处はタクラマカン砂漠開発の一拠点となっているらしく、少し離れた丘の上には30階建て位の高層住宅が立ち並び、道路沿いにも新しい近代的なビルが並ぶ新市街が出来つつあるが、一方古いトタン屋根や日干しレンガの平家がならぶ地区もあり、道路も車や人通りが多く混然としているが、活気のある街であった。先を急ぐ為「鉄門関」へ行くのも取り止め、重荷を積んだトレーラーも行き交う、交通量のびっくりする程多い道を進む。コルラから一山越え平地に出ると、建設中の高速道路と未完部の砂利道が頻繁に交錯する。

17:30 庫米什にて少し早めの皿うどんの夕食。食後の散歩で、裏の砂山の向こうに崩れかけた城壁が遠望出来たが、名称も時代も判らない。18:45 出発、間もなく峠道にさしかかり、高々と聳える岩山の裾を登りきり、今度は河沿いの今にも崩れてきそうな岩が頭上に引っ掛かっている谷間の道を、重荷に喘いで登ってくるトレーラーとすれ違いながら下る。2台のランドクルーザーが相次いで不調になり、下りを利用して、薄暗くなって来た20:30何とか山道を抜ける。

一台はエンジントラブル、もう一台は前輪サスのトラブルらしく、自分達では手に負えないので、低速で次ぎの町トクスンに辿り着き、修理屋へ直行するも、2台の修理には4~5時間必要との事。運転手も朝から650Kmも走り続け、疲れきった様子でもあり、このままウルムチまで走るのは無理と判断、そこに宿泊する事になった。

21:00 トクスン、「鴻雁賓館」(HONGYAN HOTEL)に到着。やっとホテルと呼べる所に宿泊出来た。バスタブは無いが、暖かいシャワーを存分に浴びて、気分良く着替え、久し振りに日本へTEL. しようとするが、受話器に全く反応が無い。コードを辿ってみると途中で途切れたままなので、受付の女の子を呼び、身振り手振りでコードの切れているのを示すが、対処できず結局ダメ。受付の電話を使う羽目になる。(部屋の電話機は飾りの置物か?)

その後、中国スタッフの一人、マウンテンガイドの「Song Yu Jiung」君を案内役にして、同行の服部さんと3人でバザールへ行こうと夜の町に繰り出したが、最初にビールと本場のシシカバブーで乾杯し、さて次は?となったが身振り手振りの会話が通じず、結局ホテルへ逆戻り。後で聞くと、この旅で本場のシシカバブーを食べたのは我々だけだったらしい。

3月25日(木)

気持ちよく晴れた朝 9:00 ホテル近くの食堂で、おかゆ、ニラのパオズ、ナン、揚げパン、の朝食。修理も終わって快調なエンジン音を響かせる車で、ウルムチに向け 10:00 に出発し、直ぐに高速道路に入る。30分も走ると、行きに通ったウルムチ～トルファン間の高速道路に合流する。ウルムチに向けて山岳地帯を過ぎると、視界が開けて、遠くに白雪頂く天山山脈の美しい姿が、その手前には広大な大地に羊の群れが草を食む、牧歌的な景色が広がっている。その中を横切り、濃緑色のディーゼル機関車に牽引された長大な貨物列車や、二階建車両も混ざったカラフルな旅客列車が頻繁に行き交うのが見受けられる。

(8)

やがて高層ビルが聳えるウルムチ市街に入り、12:30 「城市大酒店」に到着。シルクロードの旅はここで終わった。ここまでの総走行距離は2100Km、時速10Km/Hr も出ない、とんでもない悪路もあった中、人も車もよく耐え、頑張ったものだ。

久々に寿司や天ぷらの日本料理の昼食の後、ウルムチ市内の観光へ。バザールへ案内されたが、地下1F、地上3Fのビル中。デパートの物産展みたいで全く興醒め。しかし乾果実類は豊富で値段も安く、特に薄くグリーン懸った白干葡萄は此処の特産でお勧め品。

夕食は街中のレストランで「中国側スタッフとのお別れ宴」。美味しいご馳走に、白酒(度数50%)、ブドウ酒、ビールもたっぷり、新疆大学への留学生も加わり、これまでの苦労話や失敗談を肴に別れを惜しみ、余った物資(フィルム、衣類、嗜好品、etc.)をプレゼントして、彼等の尽力に感謝の意を表した。ここで楼蘭・ロプノール到達の証明書(新疆中新国際旅行社発行)を手渡された。

8日振りにバスタブに湯を張って旅の汚れを流し、疲れを癒して気分良く就寝。

3月26日(金)

8時起床、まだ薄暗い窓外を見ると、何と雪がこんこんと降っていて、街中真っ白だ。先日来の心配が当たり、昨日ウルムチに到着しておいて正解だったと、ガイドの選択に感謝する。朝食後出発時間まで、思いも掛けぬ所での雪見と、ホテル前のロータリー周辺を雪の降る中散歩した。

12:00 にホテルを出て、これまでお世話になった運ちゃんとも空港でお別れ。お互いに笑顔で握手して「バイバイ」「謝々」「再見」・・・。

空港では除雪作業が続いているが雪は止んできており、飛行機の発着も見受けられるようになり、この分では出発は大丈夫と安心する。中国南方航空CZ9103 便(やはり満席)にて 15:00 定刻離陸し、18:00 北京着、偏西風の影響が往路よりも1時間も早い。

西域民族舞踊レストランで、ウイグルの民族舞踊を楽しみながら、最後の新疆料理の夕食を摂る。今夜の宿「台湾飯店」チェックイン後、揃って夜の街の散策に出かける。ホテルに近い繁華街「王府井(ワフチン)大街」を抜けて、巨大なホテル「中国北京飯店」の角を曲がって「天安門広場」へ。ニュースでよく見る「門」や「広場」も、夜の為に見通しが悪いものの、その巨大さには圧倒された。

3月27日(土)

この旅の最後の日となった。7:00 からのこの旅行で一番豪華なアメリカンスタイルのバイキング朝食の後、飛行機の出発時間まで市内見学をする。8:00 ホテルを出発、まずオリンピックに向けての市街の整備が進む中で、取り壊される運命にある、古き良き時代の面影を今に残す町並みの残る、「胡同(フートン)」に向かう。昔ながらの輪タクに分乗して、北京の伝統的家屋「四合院」が立ち並ぶ狭い路地を巡り、途中その中の一軒に家庭訪問し、庶民の生活を垣間見る。

次に「天安門広場」前の漢方薬店に寄り、漢方の「ツボ」のレクチャーや即席診断の後、漢方薬を

個々に推奨されたが、言われた通りに買うと、とんでもない金額となるので、適当に逸らしておみやげ程度を購入する。後、目の前の天安門広場を回ってみた。黄砂の所為か晴れてはいるが全体が何となく霞んだ様な日であるが、大勢の人が押しかけていて、とてつもなく広い広場を挟んで天安門と対峙して建つ、毛主席の遺体が水晶の柩の中に安置されていると云う「毛主席記念堂」には、一目見ようと云う人々が長蛇の列を作り、根気良く待っていた。又、広場は風を揚げたり、そぞろ歩きをする人々で溢れていて、人海戦術の国らしいマンパワーを見せつけられた気がした。

14:00 発 JL786 便にて関西国際空港に 17:30 着、往路より早く、正味 2 時間 30 分の飛行。
(9)

長いと思っていた旅も、終ってみれば、「もう少し時間が欲しかった」とか、「あそこの写真を、もっと撮っておけば良かった」とか思い直す場面も多い。

スウェン・ヘディンの「中央アジア探検紀行全集」を、順次買い揃えて読み耽った時からシルクロードに憧れ、何時かは自分の目で確かめ、雰囲気を感じたいと思っていたが、その願いは 3 年前の夏に、西安(長安)・成都・ラサ・敦煌・トルファン・ウルムチと巡った旅で初めて実現できた。

今回は図らずも、ヘディンの言う「さまよえる湖・ロプノール」と、謎とロマンに包まれた古代王国「楼蘭」の、故城遺跡と彩色壁画の発見された古墳に、足跡を印す事が出来るチャンスに恵まれ、同時に 4WD に依る得難い体験をしたが、シルクロードにはまだまだ行ってみたい所も多く、限りある体力と資金のバランスを見ながら、これからも旅が出来れば・・・と思っている。

(終り)

編集後記

11月、関西の博物館や美術館が無料で入れる日があった。近隣に民族学博物館があるので行ってみた。紅葉の公園を抜け、アラビアンナイトの特別展をやっている別館に入ると昔からの千夜一夜物語の書物が展示されていた。もともと二百数十しかない物語であること、現在戦争で大変なバクダットが主な舞台であること、アラジンの魔法のランプやシンドバットは含まれていなかったことなど、もともとアラビアンナイトに興味も関心もない者にとってはそんなこともトリビアであった。

家に帰り、偶々あったディズニーのアニメ「アラジン」のDVDを見ていると少し気になるシーンが出てきた。アラジンが魔法使いにランプを奪われ、国を追放され、吹雪の山中で難渋するという場面である。中東で雪はないだろうと変だなと思っていた。そしていろいろと調べてみると、なんとアラジンと魔法のランプの舞台は中国であるということがわかった。するとあの雪の山はヒマラヤかなということで妙に納得した次第である。

実際、図書館で借りた本の書き出しは、「昔中国に・・・」という書き出しで始まり、挿絵も弁髪姿のアラジンであった。再度、民族学博物館のホームページで確認すると、特別展では弁髪のアラジンの絵が展示されていた。

日常的に戦火のバクダットを見ているわりにはアラビア文化は遠い存在であることを痛感した次第であった。

小生もランプを手にしていればあっという間に会報を発送できたのですが、未だにランプは手に入らず、発行・発送が遅れましたことをお詫びいたします。 (Y)